多剤耐性結核に対する新規治療用ワクチンの開発・実用化に関する研究

研究分担者　露口一成　NHO近畿中央胸部疾患センター
臨床研究センター　感染症研究部長

研究要旨
2006年 1月から 2012年 12月までの期間に NHO近畿中央胸部疾患センターで入院加療を行った多剤耐性結核の治療成績について臨床的検討を行った。治療成功率は 70.9%で感受性結核に比べて不良であり、超多剤耐性結核では 45%とさらに不良であった。手術を行えた症例では比較的予後は良好であった。

A.研究目的

イソニアジドとリファンピシンの両剤に耐性である多剤耐性結核の予後は感受性結核に比べて不良であるとされている。NHO 近畿中央胸部疾患センターで治療を行った多剤耐性結核症例について治療成績を臨床的に検討することを目的とする。

B.研究方法

NHO 近畿中央胸部疾患センターにおいて 2006年 1月から 2012年 12月までの間に入院加療を行った多剤耐性結核症例 55例を対象として、その背景因子、治療成績等につき臨床的に検討を行った。

（倫理面への配慮）

カルテをもとにした後ろ向きの検討であり倫理面における障害はないものと考えられる。

C.研究結果

55例の平均年齢は 58.9歳で、男性 37例、女性 18例であった。初回治療例が 26例、既治療例が 29例であった。55例中、超多剤耐性結核（XDR-TB）例は 20例であった。治癒は 22例、排菌陰性化は 17例、治療失敗は 3例、結核死は 9例、非結核死は 2例、脱落は 2例であった。治癒＋排菌陰性化を治療成功とすると、全体の治療成功率は 70.9%であったが、XDR-TB 例での治療成功率は 45%にとどまった。手術を行った例は 14例あり治療成功率は 92.9%であった。

D.考察

多剤耐性結核の治療成績は感受性結核に比べて不良であり、XDR-TBはさらに不良であった。手術を行えた例の予後は比較的良好であった。

E.結論

多剤耐性結核の治療成績は満足のできるものとはいえず、新薬を含め新たな治療法の開発が必要である。

F.健康危険情報

異常なし

G.研究発表

１．論文発表

なし

２．学会発表

１．露口一成：新規抗結核薬．第 88 回日本結核病学会総会、教育講演 2013年 3月 29日、千葉市

２．露口一成：日常の呼吸器診療に紛れ込む結核を見落とさないために　間質性肺炎に合併した結核．第 53回日本呼吸器学会学術講演会シンポジウム、2013年 4月 20日、東京

３．露口一成：リスク要因集団における結核 −より積極的な潜在性結核感染治療を含めて−．　第 67 回国立病院総合医学会シンポジウム 28 結核発症のリスク要因とその対策、2013 年 11 月 9 日、金沢

H.知的財産権の出願・登録状況

１．特許取得

なし

２．実用新案登録

なし

３．その他

なし